



書評 : Peter Longerich, Heinrich Himmler.
Biographie, München 2008

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原田, 一美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004434

書評：Peter Longerich, Heinrich Himmler. Biographie, München 2008

原 田 一 美

I

ハンナ・アーレントは、ホロコーストという前代未聞の蛮行がアイヒマンのような平凡な官僚によって遂行されたことを評して、「悪の凡庸さ」と呼んだ。それでは、命令を下したヒトラーや、あるいはヒムラーのような人間はどのように呼べるのだろうか？

かつてナチズムの支配構造をめぐって、ヒトラー個人の意図や役割を強調する「意図派」とナチ体制の構造や機能を重視する「機能派」とのあいだの論争があった。このような議論は歴史研究に必ずつきまとうものであり、「歴史における個人の役割」をどのように考えるのかという問題でもある。もちろん、ドイツにおけるナチ体制の成立には、ドイツという国のさまざまな歴史的要因および近代という時代の要因——「近代の病理」（ポイカート）——が複雑に絡まり合っていた。だが、それでも、ヒトラーという人物がいなければ、ナチズムの相貌は違ったものになっていたであろうということも確かである。まったく同じことが、ナチ体制の重要な柱の一つである親衛隊についても言えよう。ハインリヒ・ヒムラーがいなければ、「親衛隊国家」の相貌もまた違ったものになっていたであろう。

ホロコーストというナチスの国家的犯罪は親衛隊を抜きにしては語れない。また、この親衛隊は全国指導者ヒムラーを抜きにしては語れない。だとすれば、ナチ体制においてヒムラーが果たした役割は決定的に重要である。ヒムラーとはどのような人物だったのか。彼は何のために、親衛隊国家を創り上げたのか。だが、これほど重要な役割を果たした人物であるにもかかわらず、これまでヒムラーについて書かれた伝記は驚くほど少ない¹。本書は、このような研究状況の中で出版されたヒムラー伝である。

著者のロンゲリヒによれば、ヒムラーと親衛隊の歴史をあらゆる細部にわたって理解し、説明しようとするれば、伝記的アプローチしかない。だが、1930年代半ば以降については、伝記的方法では限界があるという。というのは、この時期になるとヒムラーのプライベートな生活はもはやないも同然になるからである。したがって、伝記的アプロ

チと構造史の結合こそが有効な唯一の方法となる。このような問題意識によって執筆されたこのヒムラー伝は、本文だけで770頁、注と文献目録を加えれば1000頁を超える大著であり、すでに膨大な数におよぶ親衛隊やホロコーストなどに関する研究の成果を取り入れて、ヒムラーという人物に迫ろうとする壮大な試みである。

それではまず、その内容を簡単に紹介しよう。

II

本書は6部構成をとっており、その具体的内容は以下の通りである。第I部：若きヒムラー、第II部：第三帝国において、第III部：騎士団、第IV部：戦争―野心と失望、第V部：大ゲルマン帝国―生存圏と民族虐殺、第VI部：分割払いの破滅²。

まず、第I部について。ヒムラーが厳格なカトリックの家庭で育ったことはよく知られている。彼の父、ゲーブハルトは、小ブルジョワの家庭に生まれながら、ギムナジウムの校長にまで社会的昇進を果たした人物であった。ヒムラーは、ゲーブハルトとミュンヘンの商人の娘アンナ（・マリア・ハイダー）との第二子として、1900年に生まれた。5年後には弟エルンストが生まれている。ゲーブハルトは息子たちを「勤勉、義務への忠誠、道徳的潔癖さ」をもった「有能で、宗教的で、ドイツの信念をもった人間」に育て上げようとした。夏休みにも日記をつけさせ、それを読んで添削するほどであったという。

ヒムラーは「戦争青年世代」³に属する。彼は、1917年12月に、第11歩兵連隊に将校候補者として受け入れるという知らせを受け取り、1918年1月から訓練を開始したが、結局前線には行けず、12月には軍を去らねばならなかった。彼は、このことを重大な恥辱だと感じ、将校としての本来の使命を妨げられたという見方を生涯、保持し続けることになる。

1919年10月、ヒムラーはミュンヘン工科大学に入学した。大学時代の彼は、人種主義的反ユダヤ主義に共感を抱いてはいるが、まだ急進的な反ユダヤ主義的立場には立っていない。このことは当時の彼の日記から窺われるという。

一方、すでにこの時点から軍隊への熱狂ぶりは際だっていた。「参戦者同盟」に入り、さらに予備軍にも所属して射撃訓練などに参加していた。自らを兵士として自己様式化していたのである。ロンゲリヒは、このようなヒムラーの態度を以下のような形で心理的に説明している。つまり、彼には愛情や保護を求める抑えがたい気持ちがある一方、これを克己心や自制という不断の努力で克服しようとしていた。軍隊はまさに、規則とコントロールを求める彼の欲求に合致したのだという。

さて、ヒムラーは1922年ころから反ユダヤ主義志向を強め、急進的な右派の陣営で活発に活動するようになっていった。23年11月のミュンヘン一揆には「旗手」として参加している。その後、グレゴア・シュトラッサーの下で活動するようになり、26年9月には、ナチ党の宣伝局長になったシュトラッサーの代理としてミュンヘンの党本部に移った。27年9月には、「親衛隊全国指導者代理」となり、29年1月には「全国指導者」となった。

第Ⅱ部では、ヒトラーによる政権掌握から戦争勃発までの時期において、ヒムラーが如何に権力を拡大させていったのかが描かれる。周知のように、1933年1月30日のヒトラーの首相就任から、7月の一党支配確立にいたる過程で中心的役割を果たしたのは、テロであったが、このテロ装置が全国統一的に確立されるにいたるには時間がかかった。そして、この過程のキーパーソンへと躍り出たのがヒムラーであり、結局、彼がすべてのライヴァルに対して勝利を収めたのである。

ヒムラーは、ミュンヘンの警察機構に対する支配権を掌握したのを皮切りに、「驚くほどの外交的・権力政策的巧妙さ」をもって、各ラントの警察機構を掌握していった。

このようなヒムラーの権力拡大において重要な前提となったのが、「レーム事件」に対する彼の貢献であった。この事件で、ヒムラーは、エルnst・レームとシュトラッサーという、かつての師であり、個人的にも親しかった二人を殺害させた。こうして、ヒムラーはヒトラーに対する絶対的忠誠を示したのである。

1936年6月に、ヒムラーはついにドイツ警察長官に任命された。警察は形式的には内務省の管轄下であったが、ヒムラーは、警察と親衛隊を融合させることによって、実質的には独立した機構へと発展させていく。ロンゲリヒによれば、独裁体制における警察機構の長はジレンマに陥るといふ。つまり、敵の撲滅が成功しすぎると、警察長官の地位が弱まる恐れがあるのである。ヒムラーは、このようなジレンマから抜け出す可能性を「総体的予防」に求め、このためにさまざまな手を打った。ヒムラーはすでに、ナチスの人種イデオロギーの意味で国民（民族）と「アーリア人種」をすべての潜在的な危険から守る「国家防衛部隊」を構想していた。

警察と親衛隊によってしっかりと組織された「国家防衛部隊」を作り出そうとするヒムラーの努力には、権力政策上の考慮ばかりか、彼の恐怖や偏見、気まぐれや趣味や情熱といったものが入り込んでいたという。たとえば、同性愛への嫌悪、キリスト教の激しい拒絶、兵士的なものすべての理想化、また彼の度を越えたコントロール欲などである。ロンゲリヒは、ヒムラーが「国家保護」だと定義したものは、ヒムラー個人の自己保護とも理解できると解釈している。

第Ⅲ部では、ヒムラーの世界観（世界像）の検討が試みられている。彼の世界像は、曖昧で時とともにかなり変化しているが、それでも一定の基本的観念は認められるという。たとえば、なんらかの「(大)ゲルマン帝国」の再建、「アジア」・キリスト教・ユダヤ人に対する敵対などである。とはいえ、彼は、特定の、イデオロギー的に固定されたプログラムを実践に移そうとしたわけではない。ヒムラーは、きわめて柔軟で適応力のある政治家だったので、その時々の方針をイデオロギーの小道具で正当化することができたのである。

ヒムラーにとって、キリスト教世界——彼はこの世界の中で大きくなったのであるが——との対決は、まさに実存的な意味をもっていたという。脱キリスト教化と再ゲルマン化こそ、彼が親衛隊に与えた本来の使命であった。親衛隊における「ゲルマン崇拜」は、ゲルマン人の英雄や徳に対する若きヒムラーの熱中に由来するものであるが、それでも、彼の個人的偏愛の単なる結果としては説明できない。彼にとっては、むしろゲルマンの遺産の保護者としての確固たる役割を親衛隊に保証し、そのことによって、ナチズムのような、強くイデオロギーに基づく体制の中で、威信と権力を強化することが重要であった。彼は、「ゲルマン崇拜」の強調を通して親衛隊特有のアイデンティティの基盤を創り出そうとしたのである。

第Ⅲ部では、ヒムラーの指導スタイルについても触れられている。親衛隊は時とともに膨張していくが、ヒムラーは、親衛隊が抱え込む多様な領域がいくつかの自立的な権力ブロックへと分裂することを防ごうとした。ヒムラーは、彼の杓子定規な態度から推測されるのとは違って、けっして官僚ではなかった。逆に、彼の指導スタイルは、高度な計算不可能性を特徴としており、このような指導スタイルは、他人に対する不信感とコントロール欲という彼の性格に由来するものであった。

ヒムラーは、親衛隊を純粋な「男性同盟」ではなく、「氏族 (Sippe)」として組織しようとした。したがって、彼は、親衛隊員が「正しい」配偶者を選択することにも大きな価値をおいたのである。もちろん、実際には「結婚命令」は繰り返し無視され、体系的な生物学的「選別」が行われることはなかったが。

いずれにせよ、ヒムラーは、親衛隊員たちを、厳格であると同時に思いやりのある父親として教育し、褒めたり罰したりしようとした。彼が親衛隊員に指令した、配偶者選択や性道徳、家族計画に関する厳格な考え方には、彼自身のきわめて個人的な経験が反映されていた。親衛隊とは、ヒムラーにとって単に政治的な組織ではなく、彼自身の一部だったのである。

第Ⅳ部は、戦争勃発から独ソ戦開始までのヒムラーおよび親衛隊の活動を扱っている。

ヒムラーにとって、第二次世界大戦の開始は、大きなチャンスの到来を意味した。まず第一に、彼がこれまで「国家防衛部隊」という名の下で実現しようとしていたものを現実化する可能性が生まれた。親衛隊の種々の武装部隊の軍事的投入によって、自律した軍事組織（「武装親衛隊」）を設立できるチャンスが与えられたのである。

第二に、「大ゲルマン帝国」実現に向けた植民政策に関する権限を手にすることができた。ヒムラーは、すでに1938年11月に親衛隊幹部たちの前で、彼のユートピア「大ゲルマン帝国」について語っていたが、この時点ではまだその実現は遠い将来のこととされていた。それが、39年10月、「ドイツ民族性強化帝国委員」に任命され、占領地域で急進的な「民族的な新秩序」実現を試みるようになったのである。

第V部は、独ソ戦開始以降の動向をテーマとしている。独ソ戦は当初から世界観的・人種主義的殲滅戦として考えられていた。ヒムラーは、6月半ばに親衛隊の高官たちを集め、そこで、ソ連の住民3000万人を「削減」しなければならないと語ったという。

東方占領地域帝国大臣にローゼンベルクが任命されたことは、ヒムラーにとっては手痛い敗北であったが、ロンゲリヒによれば、これはヒムラーが反ユダヤ人政策のさらなる急進化を推し進める決定的な転換点となった。こうして、ユダヤ人の殺害は、男性ばかりか女性や子どもにも、さらにヨーロッパ全域へと拡大されていった。ちなみに、一般にこの過程はヒトラーによる個別的な命令によって実行されたと考えられているが、このような推測は実際の出来事にはそぐわないという。ナチ指導部全体に「ユダヤ人問題」を急進的な殺害という手段で「解決」することについてはコンセンサスが存在し、具体的な遂行は、上から与えられた一定の枠組みと下からのイニシアティブの協働作業という、この政体に特徴的なやり方でなされたのである。

占領地域で実行された植民政策などの「ゲルマン化」政策がいかに野蛮で非人道的なものであったかについて、詳細に描き出されている。たとえば、「良き人種」の子どもをドイツに連れてこられた外国人女性強制労働者から奪ったり、併合地域や占領地域からドイツに連れてきたりする政策である。こうした子どもや植民の際の住民を「選別」する人種主義的基準がいかに恣意的なものであったかについても指摘されている。

1942年の時点でヒムラーが手にしていたのは、ヨーロッパ全領域で行使される無制限のテロルと大量殺戮のシステムであった。たしかに、42年11月に連合軍が北アフリカに上陸し、戦争は大きな転機を迎えることになるが、ヒムラーが解き放った展開のダイナミズムはもはや止めることができなかった。むしろ、第三帝国が崩壊に向かえば向かうほど、ヒムラーの権力は大きくなっていった。

第VI部では、第三帝国が崩壊に向かうという状況のなかで、ヒムラーがどのような

行動をとったのかが描き出されている。

Ⅲ

以上、紙幅の関係で、本書で取り上げられている多岐にわたる問題のほんの一部しか紹介できなかった。また、それらの問題について従来の研究と付き合わせながら論評することも評者の能力を超えている。そこで、今後の研究課題と考えられるいくつかの点についてコメントするにとどめたい。

まず第一に、ヒムラー個人と親衛隊の関係について。本書は、親衛隊はまさにヒムラー自身の一部であり、彼が「国家保護」のために行おうとしたことは彼自身の自己保護でもあったことを強調する。つまり、親衛隊がまさにヒムラーの「作品」として描き出されているのである。これは、ヒムラー伝という本書の性格上やむを得ないことではあると思われるし、ヒムラーの目から見れば、まさにその通りだったのであろう。だが、ヒムラーの「結婚命令」が繰り返し無視されたように、親衛隊を「創り上げる」に際しては、ヒムラー以外の要因も当然さまざまな形で作用したと思われる。この点を詳細に明らかにしていく必要があるだろう。もっとも、ヒムラーは「きわめて柔軟で適応力のある政治家」であったことも指摘されているので、ヒムラーの意図したものと「現実」の腑分けは非常に困難であらうが。

親衛隊は、第三帝国において、とりわけ戦争開始後は、さまざまな機能を抱え込んだ組織として膨張を続けていく。ヒムラーはこのような分裂しかねない膨大な組織のさまざまな部分領域をしっかりと束ねておこうと不断の努力を続けたという。組織の細部にいたるまでコントロールしようとするヒムラーの指導スタイルは、ヒトラーの指導スタイルとは大きく異なっている。このようなヒムラーのやり方に限界はなかったのか、巨大な「親衛隊帝国」内部に分裂の契機はなかったのか、このような問題の解明も必要であらう。

第二は、ヒムラーの世界観の問題である。ヒムラーの世界観については、すでにクrollsが『ナチズムと歴史思想』において分析を試みている⁴。クrollsによれば、ヒムラーがめざした「大ゲルマン帝国」は、人種的、生物学的に基礎づけられた超国家的な形成体であり、ナショナリズムに基づく「国民国家」を乗り越えようとするものであった⁵。とすれば、ヒムラーの「人種主義」の内容、とくに親衛隊内でこれに異論はなかったのかどうか非常に重要だと思われるが、本書ではあまり触れられていない。ヒムラーが重視していたといわれる親衛隊内での世界観教育の内容や隊員によるその受容——後者の問題を明らかにすることは困難であらうが——について、詳細に検討する必要があるだろう。たとえば、ロンゲリヒは、一見すると馬鹿げていると思われる「ゲルマン崇拜」も、

親衛隊特有のアイデンティティ基盤を創り出そうとする試みの一つであったと解釈しているが、この「ゲルマン崇拜」は隊員たちにはどのように受けとめられたのであろうか。

第三は、ホロコーストあるいは、もっと広くヒムラーの「新秩序構想」の実践をめぐる問題である。彼にとって、ヨーロッパ規模でのホロコーストの実行は、もっと包括的な新秩序構想実現に向けた第一歩であった。というのは、1942年夏ころのヒムラーの休みなき活動から、ヨーロッパ・ユダヤ人を殺害するという最終的な決定が、一連の基本的な転換——親衛隊にナチス生存圏帝国建設の際の中心点役割を確保する結果となる——の最初に行われたことがわかるからだという。この問題についてはすでに多数の研究がなされているが、ロンゲリヒのこの主張はホロコーストや「民族の耕地整理」について考えるために決定的に重要である。今後、この主張についてさらに実証的に検討される必要があるだろう。

ホロコーストに関しては言うまでもなく、親衛隊に関してもすでに膨大な数の研究が蓄積されており、もはや個人では見通すことができないほどの分量になっている。しかも、研究領域はますます細かく細分化されるようになっていく。このような研究状況にあって、本書は、これらの細分化した研究領域をもう一度まとめ上げようとする試みでもある。その意味で、今後、ヒムラーや親衛隊、ホロコーストなどに関わる問題に取り組もうとする者にとって、本書は欠かせないものとなるだろう。

注

- 1 ロンゲリヒによれば、比較的初期に書かれた2冊の伝記は、今では完全に古くさいものとなっており、それ以外には、若いヒムラーを描いたブラッドリ・スミスの伝記（1970年）とヨーゼフ・アッカーマンの伝記（1970年）があるくらいである。「史料・文献に関するコメント」（971～974頁）を参照。
- 2 原題は、Untergang auf Raten。この言葉は、東独についての研究で、使用されている。メアリー・ブルック（芝健介訳）『二つのドイツ 1945～1990』（岩波書店、2009年）、16頁。
- 3 「戦争青年世代」は、とくにウルリヒ・ヘルベルトが創り出した概念で、「冷静さ、非情さ、即物性」などを特徴としている。46頁を参照。
- 4 Frank-Lothar Kroll, Utopie als Ideologie. Geschichtsdnken und politisches Handeln im Dritten Reich, Paderborn 1999（小野清美・原田一美訳『ナチズムの歴史思想—現代政治の理念と実践』柏書房、2006年）。
- 5 同上書、177～78頁。